

インタープリテーション活動の新しい動向

西村 仁志

概要

インタープリテーションとは「環境保全地域や公園、博物館など、社会教育の場における持続可能な社会づくりのための教育的コミュニケーション」である。こうした活動は20世紀初頭にアメリカの国立公園において始まった。日本においては1980年代から導入されはじめ、現在では自然公園のほか動物園や水族館、博物館等の社会教育施設などでもインタープリテーション活動が行われている。

インタープリテーション活動の当初の役割は、①自然環境や文化的環境への関心と理解を高めること、②興味を刺激・啓発し、生活に新しい視点を与えること、③活動主体（担当行政機関や民間団体）の目的・業務の内容を知らしめることという3つであったが、近年さまざまな新しい領域でもインタープリテーション活動が取り入れられるようになったことで、その役割が拡大してきた。

環境教育とESD、生物多様性保全におけるCEPA、科学技術コミュニケーションの領域では関係者が立場やセクターをまたいで出会い、その架け橋となる活動としてインタープリテーションが期待されている。エコツーリズムにおいてはインタープリターがプロフェッショナルとして専門性向上が課題となっている。都市におけるインタープリテーションでは、シチズンシッ

プを育むという役割が明らかになってきた。このように社会問題の解決や、持続可能な社会づくりにむけて、インタープリテーションが果たすべき役割は今後さらに拡大すると考えられる。

1. はじめに

インタープリテーションとは「環境保全地域や公園、博物館など、社会教育の場における持続可能な社会づくりのための教育的コミュニケーション」であり、「参加者の興味や関心を引き出しながら、ものごとの背後にある本質に迫ろうとする、体験を重視した教育活動」と定義づけられている¹。日本語には「Interpretation (Interpreter)」を「解釈(者)、説明(者)、通訳(者)」と訳されるが、英語圏では先述のような「環境保全地域や公園、博物館などにおける解説活動」を「Interpretation」と呼び、またその解説者のことが「Interpreter」と呼ばれ、専門家としての職能が確立している²。

さて、近年の動向として、このインタープリテーションという職能や活動が求められる分野や領域は上記の「環境保全地域や公園、博物館など、社会教育の場における」という範囲にとどまらず、新しい領域に拡大しつつある。本稿ではインタープリテーション活動導入の経緯と、その活動の特性についてとらえたうえで、

¹ 古瀬浩史「インタープリテーションとは」(津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年) p.3

² 日本にインタープリテーションの研修手法を導入した先駆者の一人、小林毅によれば「インタープリテーションは通常、解説や自然解説と訳されるが、日本人がピンとくるような適当な言葉とは言えず、そのままカタカナ語でインタープリテーションとして使われている。」と述べている。(小林毅「動物園・水族館におけるインタープリテーション」社団法人日本動物園水族館協会『新しい教育モデルプログラム～動物園・水族館を利用した生涯学習の展開～』2002年、社団法人日本動物園水族館協会)

こうした拡大の動向を整理し、その意義を明らかにするものである。

2. インタープリテーション活動の導入

2.1 起り

19世紀から20世紀にかけて活動し、「アメリカ自然保護の父」ともよばれる John Muir はアメリカにおける「ウィルダネス（原生自然地域）」の価値について着目した。このウィルダネスを森林伐採やダム建設などの開発から護り、後世にまで遺すべきものとして社会にその支持を拡げるために多数の出版物を著した。また世界で最初の環境保護 NGO である Sierra Club を創設して、政府や議会へのロビー活動を行うとともに、自らがインタープリターとなって、多くの人々に自然を直接体験してもらい、その美しさ、すばらしさを伝えることを実践したのである。

アメリカ合衆国は1872年に世界初の国立公園制度を創設するが、長年その管理を行う専門部署はなく、管理は陸軍が担っていた。1916年になってようやく国立公園局を設立する。初代長官として民間人から招聘された Steven Mather は国立公園への道路網や滞在施設の整備を行って、国立公園の大衆化を促すとともに、1920年にパークレンジャー（国立公園管理官）の配置とインタープリテーション活動の導入を行う。この活動の導入にあたっては慈善活動家でありナチュラリストでもあった C.M. Goethe の助言を得た。Goethe はスイスを訪問した際に山岳ガイドの活動に感銘を受けた。山道と一緒に歩いて花や植物、そして景色を愛でる営みは、自分たちの国土の美しさと驚異を共有することで愛国心やアイデンティティに対する共通の考えを育むことにつながっていると考えたのである³。Mather はこうした活動を各地の国立公園に導入すべく、パークレンジャーの制度を創設して配置した。彼らがリードするガイド・ウォーク、キャンプファイヤーなどのインター

プリテーションプログラムはアメリカの国立公園を特徴づけるものとなっている⁴。

元新聞記者で、評論家であった Freeman Tilden は、国立公園局の依頼をうけて全米各地の国立公園のインタープリテーションを数年に亘って見聞し、1957年に著書 *Interpreting Our Heritage* を著した。Tilden はインタープリテーションを「単に事実や情報を伝えるというよりは、直接体験や教材を活用して、事物や事象の背後にある意味や相互の関係を解き明かすことを目的とする教育的活動⁵」であると定義し、またインタープリテーションに関わる諸原則を示した。このようにしてアメリカにおいてインタープリテーションの技法が確立されていったのである。

2.2 日本における導入

日本においてインタープリテーション活動が本格的に行われるのは1980年代になってからである。1981年に東京都の高尾ビジターセンターに日本自然保護協会から解説員が派遣され、北海道のウトナイ湖サンクチュアリに日本野鳥の会がレンジャーを配置している。その後環境庁（現：環境省）における「自然公園利用のあり方検討小委員会」からの答申（1987年）や「自然解説担当者研修会」の開始（1992年）、また財団法人キープ協会や自然教育研究センターにおけるインタープリター養成事業の開始（1992年）などを通じ、自然体験分野におけるインタープリテーション活動が徐々にひろがってくるようになる。また動物園・水族館等においては、東京都立動物園における動物解説員制度の導入（1987年）、また東京ガスによる都市型環境教育施設「環境エネルギー館」の開館（1998年）、2000年代に入り「日本科学未来館」の開館（2001年）など、博物館等の社会教育施設においても「インタープリター」や「ミュージアム・エデュケーター」などの名称で現場での教育普及にあたる専従スタッフが置かれるようになっていく。

³ U.S. Department of State. "Park Rangers and Swiss Guides", *eJournal USA*, Vol.13 No.7, 2008

⁴ 国立公園は合衆国政府の直轄地であるため、パークレンジャーの業務はこうしたインタープリテーション活動のほか、自然環境、野生生物の調査や保護、道路や施設の管理、警察・消防など多岐にわたる。

⁵ Tilden Freeman, *Interpreting Our Heritage*, The University of North Carolina press, 1957, p.8

3. インタープリテーション活動とは

3.1 インタープリテーション活動の役割

自然公園での活動として始まったインタープリテーション活動は、人為開発により消失の危機にあった自然環境や文化遺産の価値を守り伝え、その保存や管理に関する方針を決定するために必要な情報や知識を広く一般市民に伝えるという役割からスタートした。すなわちインタープリテーションの当初の役割は、以下の3つである⁶。

- ①自然環境や文化的環境への関心と理解を高める（その場所の適正な利用を促し、大切にす
る人を育てる）
- ②興味を刺激・啓発し、生活に新しい視点を与
える（レクリエーションや生涯学習の機会を
提供する）
- ③活動主体（担当行政機関や民間団体）の目的・
業務の内容を知らしめる

またアメリカ合衆国政府がこうした活動に直接関与してきたということ、すなわち①における「場所」が合衆国政府の直轄地⁷であること、③の活動主体が国の機関であることで、もうひとつ別の意図が加わる。Mather は世界各地から新大陸に移民としてやってきた多様な民族・言語の背景をもつ人々が、アメリカ大陸の大自然を直接体験することで「この大陸が自分たちの土地であること」そして自分たちがアメリカ人であることを共通して自覚することが重要であると認識していたのだ。

その後、国立公園局は、原生自然サイトだけにとどまらず、アメリカ合衆国の歴史、すなわち初期の永続的植民地となったバージニア州のジェームズタウンや、独立戦争・南北戦争の戦跡、アメリカ先住民やマイノリティの苦難（第二次大戦中の日系人強制収容所も含まれる）に

関わるサイトなどを管理するようになる。つまり「優れた業績から内輪の恥まで、国家としての成長のあらゆる側面を浮き彫りにする地域や場所⁸」を管理運営してきた。つまりアメリカの国立公園で行われてきたインタープリテーション活動は自然や歴史についての理解を助けるだけではなく、パークレンジャーが、来訪者との直接対面の機会によって、まさにアメリカ人を一つのコミュニティとして結びつける役割を果たしてきたといえる。

3.2 インタープリテーション活動の展開

インタープリテーションの実際の活動形態は多様である。インタープリターが参加者（学習者）に直接対面する直接解説型のものとしては、案内施設のインフォメーションカウンターでの対応、ガイドウォーク、展示解説、ネイチャークラフト、キャンプファイヤーでのトーク、解説付きスライドトーク、講演会などが挙げられる。これらは対象人数に上限があったり、実施する時間に制約がある反面、対象者の興味関心や状況、質問等にその場で対応することもでき、教育的な効果も大きい。

一方でインタープリターが参加者（学習者）に直接対面しない間接解説（無人）型のものとして、室内展示、野外解説板、セルフガイドシステム、ガイドブック・ワークブックなどの印刷教材、ティーチャーズガイド、ナレーション入りの映像教材などがある。これらは対応するインタープリターを常駐、待機させる必要がないため、利用者が自分の都合にあわせて体験することができ、また多くの人々に対応することができる。その反面、状況に応じた対応をその場ですることは困難である。小林は地域や施設のインタープリテーション計画をつくるうえでは、これらのメリット・デメリットを上手に活かして作成することが重要であると指摘している⁹。

⁶ キャサリン・レニエ、マイケル・グロス、ロン・ジーマン著、日本環境教育フォーラム監訳『インタープリテーション入門』p.22

⁷ アメリカの国立公園は「営造物公園」でありアメリカ合衆国政府が土地の権原を取得して設置している。一方で日本の国立公園は「地域性公園」であり、土地の所有権にかかわらず一定の要件のある地域を公園として指定し、開発をはじめとした人為行為を規制することによって目的を達成しようとする。

⁸ ボーマー「公園はすべての米国人を結ぶ特別な場所」(Ejournal USA, 第13巻第7号「国家遺産としての国立公園 = National parks, national legacy」) 米国国務省国際情報プログラム局, 2008年, p.35

⁹ 小林毅「動物園・水族館におけるインタープリテーション」社団法人日本動物園水族館協会『新しい教育モデルプログラム～動物園・水族館を利用した生涯学習の展開～』2002年, 社団法人日本動物園水族館協会, p.50

3.3 インタープリテーションの構造

インタープリテーションでは、あたかも通訳のように素材と参加者(学習者)の間にインタープリターが位置する。インタープリターは素材から事実や情報を受けとり、自らがメッセージ(ねらい・テーマ)を設定してプログラムをつくり、これを通して参加者に伝えるのである。また参加者(学習者)の個性や興味についてよく把握することが重要であり、それに合わせたプログラムとすることも大切だ(図1)。

Tilden は前述のとおり「単に事実や情報を伝えるというよりは、直接体験や教材を活用して、事物や事象の背後にある意味や相互の関係性を解き明かすことを目的とする教育的な活動」だと述べている。このことは「価値観」や「概念」といった、目には見えない、形のないものについて伝えるということであり、そこにはインタープリターのもつ感性、価値観や意図が大きく影響するのである。

4. インタープリテーションの新しい領域、役割

4.1 環境教育から ESD へ

環境教育とは「持続可能な社会を実現するた

めの教育実践」である。私たちの暮らしや社会を支える地球や地域の生態系への理解と関心を高め、それらを保全していく態度や技能、実践力を育てるものである。環境について、あるいは環境問題解決のための知識レベルの理解にとどまらず、真に持続可能な社会を実現するための「参加と行動」を求めてきたのである。そして持続可能な社会のためには健全な土台となるのが地球や地域の生態系であるため、環境教育では自然体験を重視し、インタープリテーションもその手法として用いられてきた。

1990年代には ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) の概念が登場し、2000年代においては「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESDE): 2005-2014」として採択されるなど、その国際的な共同取り組みが始まることとなった。ESD は「広義の環境教育」ともいわれ、その射程は環境問題の解決や環境面での持続可能性だけにとどまらず、人権、平和、開発などの領域における社会的公正、すなわち差別や抑圧、社会的格差がない状態の実現を通して、地球上に生きる一人ひとりが心豊かに人生を全うできることにまで広がってきたのである。

ESD におけるインタープリテーションの役割は、持続可能性や社会的公正といった抽象的でわかりにくい概念を、まさに「翻訳」してわかりやすく伝えることである。環境教育の実践

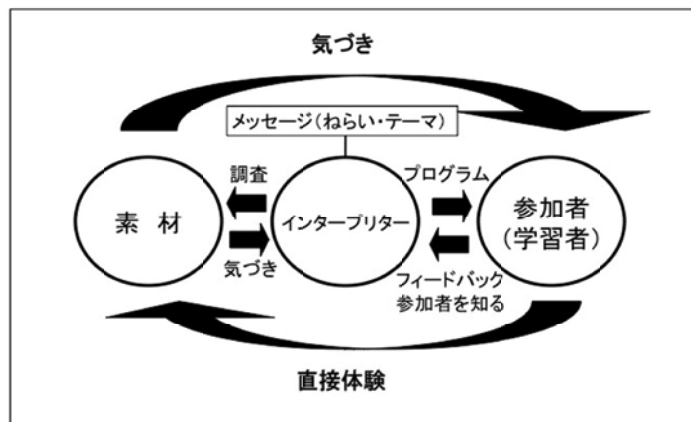


図1 インタープリテーションの構造

小林, 2002 をもとに筆者が作図

を長くリードしてきた川嶋直はESDについて「心豊かな未来を描く練習」だとし、「心豊かな未来」、「未来を描く」、「心豊かな未来を描く練習」と3つに分解し、彼なりの「翻訳」を試みてESDを説明している¹⁰。

ところが現実には、私たちが生きている社会と、目指すべき「持続可能な社会」との間には大きな隔たりを感じざるを得ない。世界各地で気候変動にともなう自然災害や生物多様性の危機、そして民族対立や軍事衝突が頻発し、また日本においては東日本大震災と福島第一原発事故を経験し、そして「公害」の発生から50年もの年月を経て、いまだ健康被害や社会的公正に苦しむ方々が多数存在する。「高度に文明化が進み続ける社会」と「多様な<いのち>を育みあう自然」、そして「<いのち>ある存在としての人間」との関係は決して良い進展をしてきたとは言えない。ESDにおけるインタープリテーションのもうひとつの役割は、実施主体としてこれらの問題の構造を理解したうえで、教育実践としてのインタープリテーション活動を通じ、こうした問題に実際にアプローチし解決することである。阿部治は、インタープリテーションを活動内容に多く取り入れている自然学校¹¹のテーマやプログラムについて「人と自然、人と人、人と社会のつながり（関係性）の再構築を地域の持続可能性の要素をつなぐことで具体化している¹²」と述べており、「つなぐ」役割の重要性について指摘している。

4.2 「CEPA」とインタープリテーション

1992年の「地球サミット」にて採択された「生物多様性保全条約」は、生物の多様性を「生態系」、「種」、「遺伝子」の3つのレベルでとらえ、生物多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用、遺伝資源の利用から生ずる利益の公正な配分を目的とする条約である。

「CEPA」とは本条約の第13条「公衆のための教育及び啓発」の条文において定められた、広報（Communication）、教育（Education）、普及啓発（Public Awareness）に関する締約国の義務である。

(a) 生物多様性の保全の重要性や、保全に必要な行動を理解するため、さまざまな伝達手段による普及啓発、そして教育事業に取り入れることを推進する。

(b) 生物多様性の保全、持続可能な利用に関する教育や普及啓発事業の計画で、必要に応じて他国や国際機関と連携する¹³。

2010年10月には名古屋市で第10回締約国会議（COP10）が開催され、全世界で取り組む戦略計画として「愛知ターゲット」が採択されたのである。日本政府もこれをうけた「生物多様性国家戦略 2012-2020」を閣議決定し、第2章 横断的施策【普及と実践】のなかに、「自然とのふれあいの場などを積極的に提供し、生物多様性の恵みにふれる体験や生物多様性に関する教育の機会を拡大することなどにより普及啓発を進める」ことが唱われている。その内容として国立・国定公園や農山漁村等で「生物多様性や生態系からの恵み（生態系サービス）を実感したり、地域の自然と共存してきた地域文化等を体験する機会の拡大をはかる」こと、また「生物多様性に配慮した商品やサービスへの認証制度や生物多様性保全のための経済的措置等の普及啓発に取り組みます。」とも記され、CEPA ジャパン代表の川廷昌弘は「生物多様性とインタープリテーションは自然や地域の歴史文化だけでなく、経済価値にもつなげる方法を検討する必要がある。¹⁴」と指摘している。

¹⁰ 川嶋直「環境教育：ESDとインタープリテーション」（津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年）p.17

¹¹ 1980年代より日本各地に成立してきた民間の自然体験を中心とした学習施設。

¹² 阿部治・川嶋直「ESD拠点としての自然学校：持続可能な社会づくりに果たす自然学校の役割」みくに出版、2012年、p.15

¹³ CEPA ジャパンによる訳。（<http://www.cepajapan.org>）

¹⁴ 川廷昌弘「生物多様性とインタープリテーション」（津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年、p.105）

4.3 エコツーリズム

すぐれた自然環境や景勝地は古くから観光の対象である。観光産業は全世界的に第二次大戦後以降、拡大傾向にあり 1950 年には約 2530 万人だった世界の観光客数は 2014 年には 11 億 3,300 万人にも上っている¹⁵。こうした傾向の背景には航空輸送手段の大型化、高速化とともに、旅行商品として大量販売され、消費されていく旅のあり方(＝マストツアー)の普及があり、同時に観光公害ともいえる現地地域への悪影響、観光(自然)資源そのものの質の低下をもたらしてきたのである。このような状況への反省から環境保全と観光開発の対立を克服する手段としてエコツアー及びエコツーリズムに注目が集まってきた。

敷田麻実によればエコツーリズムとは「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験・学習し、目的地である地域に対して何らかの利益や貢献のあるツアーをつくり出し、実践する仕組みや考え方」(敷田ほか, 2008, p.34)と定義され、地域の自然・文化資源の保護・保全と地域固有の資源を生かした観光の推進、地域経済の活性化をめざす地域づくりの取り組みである。

日本でも 1980 年代からこうした自然サイトをエコツアーガイド(＝インタプリター)が案内するツアー(エコツアー)などが実施されるようになってきた。また政府も 2004 年から環境大臣を議長とする「エコツーリズム推進会議」を設置するなど政策化をすすめ、2007 年には「エコツーリズム推進法」を制定している。

日本におけるこうした動向は、エコツアーガイドとしてのインタプリターに対するプロの専門職としての社会的認知をもたらすとともに、さらなる技量の向上も期待されることとなったといえる。敷田はエコツアーガイドについて、一般のツアーの添乗員やバスガイドのようなエンターテインメントの提供だけではなく、「エコツーリストの主体的な学びを手助けする支援者」であり、またエコツアー中のリスクマネジ

メントも担う「多能工」であると述べている¹⁶。またその専門性として、地域の自然環境についての科学的知識にとどまらず、言い伝えや地域の人々の語りなどの地域における多様な「知」、すなわち「実践の知」や「伝統的生態学的知識」なども求められ、エコツアーガイドへの際限のない技量向上への課題も指摘している¹⁷。

4.4 科学技術コミュニケーション

科学技術は利便性をもたらす一方で、例えば「遺伝子組み換え技術」や「携帯電話による電磁波問題」などに対して懸念や批判の声も上がるなど、科学技術と社会のコミュニケーションに関わる問題が起こるようになってきた。科学技術は社会に深く関与し、規制やコントロールへの社会的な意思決定が必要とされる状況が起こってきている。小林はこれを「トランス・サイエンス」的状況と呼び、「科学技術コミュニケーション」の必要性を指摘している¹⁸。「科学技術の日常生活に占める割合が大きくなっていく一方で、科学技術と社会の距離感が広がっており、科学嫌いや理科離れ、科学技術不信が進んでいる。したがって、科学技術と社会との間を取り持つ人材が必要だ¹⁹」というのである。

文部科学省は 2005 年、3つの大学でこの分野への人材養成への支援を始めている。「科学技術インタプリター養成プログラム」(東京大学)、「科学技術コミュニケーター養成ユニット」(北海道大学)、「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」(早稲田大学)、国立科学博物館や日本科学未来館でも「科学コミュニケーター」の養成が始まり、また翌年 2006 年には日本学術会議による「サイエンス・カフェ」が全国 21ヶ所で開催されるなど、科学技術コミュニケーションの場や機会が一気に始動したのである。東京大学が「科学技術インタプリター」という言葉を使用しているように、こうした分野においてもインタプリテーション活動が認識されたのである。

¹⁵ UNWTO プレスリリース (2015 年 6 月 26 日) による。

¹⁶ 敷田麻実・森重昌之『地域資源を守っていかすエコツーリズム：人と自然の共生システム』講談社, 2011 年, p.90-91

¹⁷ 同書, p.98-99

¹⁸ 小林傳司『トランス・サイエンスの時代：科学技術と社会をつなぐ』NTT 出版, 2007 年, p.2-15

¹⁹ 同書, p.22

こうした活動からは、科学的知識が欠如している人々に対して「説明」や「啓蒙」が必要だという認識から、専門家（科学者）と一般市民との双方向型、対話型のコミュニケーションを通じて、信頼の構築をはかり、また政策決定プロセスにまで結びつけることの必要性も指摘されている²⁰。

4.5 都市におけるインタープリテーション

都市は人工環境であるがゆえの特有の様々な問題が生じてきた。自然状態のままの場所や、農山漁村のような人間と自然環境の成熟した関わりのある場所や地域とは異なり、こうした都市は「人口や物質が集中したあるいは集中しつつある地域で、人間とのかかわりから見ると、絶え間ない人為の干渉にさらされており、人間と環境の関係が不安定²¹」であるといえる。都市の人口や生産活動を維持するためには、自然界から大量の水とエネルギー、そして食料をはじめとする物質の供給が欠かせず、また排水や排気・排熱、廃棄物は自然界に排出しなければならない。また、ときに自然は猛威をふるい、都市に地震や暴風雨などによる災害をもたらす。都市は人工環境でありながら、完全に自然界と隔絶してその存在を維持することはできない。

人口の集中と環境の人工化を進めたことで、大気や水質の汚染、騒音や廃棄物の増加、生物多様性の減少、地域コミュニティの衰退など都市特有の様々な問題が生じている。しかし都市はこうした諸問題を抱えながらも、そこに生きる人々が創造的な活動をたゆまず続けてきたことで、さらに人々を惹きつける魅力を持ち続けてきた。

大阪市西淀川区は1950年代から70年代にかけて激甚な大気汚染公害に苦しみ、「西淀川公害訴訟」が起きた地域である。阪神工業地帯の工場からの煤煙のほか、区内を通る高速道路、国道を通行する自動車からの排気ガスによる複合的な汚染だ。この訴訟の和解金によって設立さ

れた「公益財団法人公害地域再生センター（通称：あおぞら財団）²²」は、環境保全、生活環境の改善、西淀川地域の再生のための活動を行っている。つまりこの財団は西淀川に住む市民の方々に、環境再生とまちづくりへの関心と参加を促す大きな使命がある。そして公害からの教訓に学ぼうとする人々、それは国内だけではなく、発展途上国をはじめとする海外からの視察者を数多く受け入れてきた。そのためには西淀川の歴史と現在、そしてこの財団がやろうとしていることを、わかりやすく伝えるインタープリテーションが求められてきた。西淀川のまち、人、自然の過去と現在、そしてこれからの持続可能なまちづくりと社会的公正の観点をつなぐプログラムを開発し、実践しているのである。

こうした都市におけるインタープリテーションの実践からは、「シチズンシップを育む」という意義が導かれている。「シチズンシップ」とは「市民性」と訳され、単にそこに住んでいる、住民票があるということだけではなく、公共の責任と社会的役割を認識し、未来のまちづくりに自発的に行動していこうとすることを指しているのである。

最初に述べたように都市は人工環境であるがゆえの特有の様々な問題が生じてきた。都市住民にはこうした諸問題を正しく認識し、解決していくことが常に求められている。自らが住むまちはもちろん、他の都市の歴史や成り立ちを知ること、またインタープリターとなってこれらを伝えるということは、シチズンシップを育む上でとても重要なのである。

5. まとめ

インタープリテーション活動の当初の役割は、①自然環境や文化的環境への関心と理解を高めること、②興味を刺激・啓発し、生活に新しい視点を与えること、③活動主体（担当行政機関や民間団体）の目的・業務の内容を知らし

²⁰ 同書、p.220-230

²¹ 品田稔「環境教育の視点」（環境学習のための人づくり・場づくり編集委員会『環境学習のための人づくり・場づくり』ぎょうせい、1995）p.77

²² 「公益財団法人公害地域再生センター」ウェブサイト <http://www.aozora.or.jp>

めることという3つであった。これらは概ねインタープリテーションの概念と手法が成立した1950年代から、日本に導入されてきた1980年代にかけて、支配的だった考え方だ。一方、4章で取り上げたインタープリテーションの新しい領域、役割は1990年代もしくは2000年代以降にそれぞれの領域において期待されるようになり、取り組まれてきたものだ。4.1のESDや4.2のCEPA、4.4の科学技術コミュニケーションの領域では、「つなぐ」という言葉が多用され、関係者が立場やセクターをまたいで出会い、その架け橋となる活動としてインタープリテーションが期待されている。4.3のエコツーリズムにおいてはインタープリターがプロフェッショナルとして専門性向上が課題となっている。4.5の都市におけるインタープリテーションでは、シチズンシップを育むという役割が明らかになってきた。このように社会問題の解決や、持続可能な社会づくりにむけて、インタープリテーションが果たすべき役割は今後さらに拡大すると考えられる。

参考文献

(日本語文献)

- 阿部治・川嶋直『ESD拠点としての自然学校：持続可能な社会づくりに果たす自然学校の役割』みくに出版、2012年、15ページ
- 川廷昌弘『生物多様性とインタープリテーション』（津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年）105ページ
- 川嶋直『環境教育・ESDとインタープリテーション』（津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年）17ページ
- キャサリン・レニエ、マイケル・グロス、ロン・ジーマーマン著、日本環境教育フォーラム監訳『インタープリテーション入門』22ページ
- 小林毅『動物園・水族館におけるインタープリテーション』社団法人日本動物園水族館協会『新しい教育モデルプログラム～動物園・水族館を利用した生涯学習の展開～』社団法人日本動物園水族館協会、2002年、50ページ
- 小林傳司『トランス・サイエンスの時代：科学技術と社会をつなぐ』NTT出版、2007年、2-15ページ、22ページ、220-230ページ
- 敷田麻実・森重昌之『地域資源を守っていかすエコツーリズム：人と自然の共生システム』講談社、2011年、90-91ページ、98-99ページ
- 品田稯『環境教育の視点』（環境学習のための人づくり・場づくり編集委員会『環境学習のための人づくり・場づくり』ぎょうせい、1995年、77ページ
- 古瀬浩史「インタープリテーションとは」（津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編『インタープリター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2014年）3ページ
- ボーマー「公園はすべての米国人を結ぶ特別な場所」（Ejournal USA、第13巻第7号「国家遺産としての国立公園 = National parks, national legacy」米国内務省国際情報プログラム局、2008年、35ページ

(英語文献)

- Tilden Freeman, Interpreting Our Heritage, The University of North Carolina press, 1957, p.8
- U.S. Department of State. "Park Rangers and Swiss Guides", "Special Places Uniting All Americans" eJournal USA, Vol.13 No.7, 2008

参考WEBサイト(2015年11月30日確認):

- 「公益財団法人公害地域再生センター」 <http://www.aozora.or.jp>
- 「CEPA ジャパン」 <http://www.cepajapan.org>
- UNWTO プレスリリース (2015年6月26日)
- <http://unwto-ap.org/2015/06/26/>